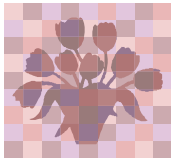


L i n a LOHAS通信



ロハスとは、“Lifestyles Of Health And Sustainability”の略語であり、“地球環境保護と人間の健康を最優先し、人類が共存できる持続可能な社会のあり方を望む様々なライフスタイル”を指します。



ロハスなライフスタイルとは、「安ければいい」「効率がよければいい」という従来型の選択基準とは異なり、「それは自分や皆の体に悪い影響を与えないものか?」「それは、地球環境にとってマイナスにならないものか?」をまず考え、それによって消費や行動を選択していくものです。そもそも、「健康」と「地球環境」は切り離せないもの。地球がボロボロになっているのに、人間が健康でいられるわけがありません。

アメリカでは、成人人口の29%がロハス思考を持ち、EUでは約35%、日本でも最近では同等以上の潜在的なロハス層が存在してくると考えられます。以前にもお知らせしましたが、「ロハスを分かりやすく社会的影響力を持つ概念として育てていきたい」という趣旨のもと、坂本龍一さん等が中心に“LOHAS CLUB”が発足し、2007年5月12日(土)~20日(日)まで「新宿御苑まるごとロハス」なるイベントも行われ、フィナーレを飾ったのは坂本龍一さんの「ロハス/環境トーク」でした。

「20年後の地球のことを毎日考えている人はあまりいない。それは、想像しないと考えられないから。でも想像することは人間の特別な能力。時間の視野を広げる簡単な方法は、子供のことを考えること。自分の子供が20歳になった時、地球はどうなっているだろうか?と考えたときに、時間の視野がぐーっと広がってつながる。」とは、坂本龍一さんのトーク。

このイベントの中で大きな柱になっているのが、「ロハス・デザイン大賞」というプログラム。今回2007年は、第2回ロハス・デザイン大賞が選ばれるのですが、ロハスの趣旨である持続可能で快適なライフスタイルや、社会の構築に対して、貢献度の高い企業活動、製品、そして個人の活動を年1回表彰していくというものです。

その候補の中に、私が長年のファンである映画監督“龍村 仁さん”を見つけとても嬉しくなり、久しぶりに龍村仁さんのホームページを拝見し、ビックリしました。それは「地球交響曲/ガイアシンフォニー 第6番」が、今年4月28日からロードショー公開されているということでした。1992年に“第1番”が上演されてから、95年“第2番”、97年“第3番”。映画作りには膨大な予算がかかるということは私たちも聞いていますが、このようなドキュメンタリー映画の分野は特に、公開といっても自主上映の形式ですから、もっと大変だと思います。“第4番”の制作のときは、「ひとコマスポンサー」を募り、制作したいということでした。一口1万円を振り込むと、映画のフィルムと台本、メイキングビデオがもらえるという仕組みで、最終的には、1万8千口ものスポンサーが集まったそうです。2001年に公開されたこの“第4番”は、「21世紀に生まれ育つ子供たちのために」というテーマで、未来を担う子供たちにエールを贈りつつ、そんな子供たちを育てるためのヒントに溢れた作品です。

* 「地球交響曲 / ガイアシンフォニー」については、私もずっと見続けてきましたが、皆様の中にも見たことのある方々がたくさんいらっしゃるかと思います。上演と一緒に行われる、龍村さんの公演もとても楽しいものです。この映画については、何回かに渡ってまた書かせていただくとしまして、今回は、龍村さんの書籍の中から少し抜粋したものをお届けしたいと思います。*

「からだとの対話」

私たちの体をつくっている物質の最小単位は“原子”である。私たちの体は、およそ10の28乗個もの原子から成り立っているという。

その原子の一個一個は、決して私たち人間だけに固有のものではない。宇宙のどこにでもある原子のひとつである。宇宙誕生（ビッグ・バン）以来、宇宙のどこかで生まれた無数の原子のひとつが今、偶然にもこの地球にあって、水や空気や食べ物を通じて私たちの体の中に入り込み、私たちの体をつくっている。

しかも、その原子は私たちの体の中にずっととどまっているわけではない。息や汗、涙となって次々と体の外へ出てゆく。5年も経てば、今私たちの体をつくっている原子は全て入れ替わってしまうそうだ。

私たちの体は原子のレベルで見ると、現実には、地球そのものや動物や植物と原子をお互いに交換しながら生きているのだ。昨日、私が吐いた息とともに、私の体から外へ出て行った原子のひとつが、今日は、街路樹の枝先に咲いた小さな花の蕾の中に入っているかもしれない。そして明日には、その蕾をついばんだ小鳥の体をつくっているかもしれない。そう思うと、私と花と小鳥の命がひとつのつながりのものである。

また、ある科学者の計算によれば、私たちの一回の呼吸によって吸い込まれる空気の中には、過去にこの地球に生きたあらゆる人たちによって呼吸された百万個以上の原子が含まれているそうだ。遠い祖先の命を支えたのと同じ原子を呼吸することによって、今の私たちの命が支えられている。

現代人の多くは、この“ひとつながり”の感覚を忘れかけている。この感覚の喪失は、現代人の「体に対する鈍感さ」から生まれている。科学技術の進歩とともに、私たちの生活は、日々便利で安全になってゆく。しかし、この便利さや安全性のおかげで、私たちは日常生活の中で、自分の体と対話するチャンスを失い、体に対して鈍感になり、傲慢になり、そしてそれがまた自分以外の生命や自然、地球そのものへの鈍感さ、傲慢さを生んでゆくのだ。しかし、我々の祖先たちは遠く離れた世界の各地で、自然の全ての現象の中に神が“宿る”という同じ自然観・生命感を抱き、宇宙創成や生命誕生についての同じ神話や伝説を生んだのだ。彼らは、自分の体と対話することによって、種の境を越えて樹や花や象や鯨と“話す”ことができた。自分の周囲にある石や水、風とはもちろんのこと、遠く離れた仲間や、時を越えた祖先とも、そして太陽や月、宇宙の彼方の星々とさえ“話”ができたのだ。

ガイア
地球のささやき 龍村仁 著



Lina Green

TEL 054-205-0308

